

かやぶき民家と土地の風土は密接な関係があり共存している

北西から吹き付ける凄まじい吹雪は、屋根の東端に官能的な造形（雪庇^{せっぴ}）を残して終息したが、青森空港では除雪隊が懸命に働いて、コンディションを良好に保っている。先日、その様子をテレビのニュースが伝えていた。

「ホワイティンパルス」といわれる青森空港除雪隊は、累計積雪量が十メートルを超える豪雪地帯の空港機能を維持していて、隊員百人の半数以上が地元の雪を熟知している農民なのだ。米やリンゴをつくる農家に、冬は海に出ない漁業者と大工や左官を加えて、除雪のプロ集団は厳しい風土と向かい合っている。

同じく、風土と関わり合いながら屋根を葺く秋田の「かやぶき職人」に、新し

い動きがあった。師走の十二月、地元紙の読者欄に「かやぶき職人に感謝」という函館市民の投稿が掲載され、仙北市の本間恵介さんの仕事ぶりを称え、感謝していたのだ。十年ほど前、秋田で「茅葺職人育成事業」を始めたとき、新潟から応募してくれた本間さんが、現在はベテラン職人となって県外へも足を伸ばし活躍している。

県の北部エリアを仕事場にする風間崇さんの年賀状に、「能代にある茅葺民家を引き継ぐことになりそうです」と書かれていたが、決意を嬉しく思いながら心配は尽きない。千葉県から移り住んで職人となり、秋田市雄和に居を構えて活動している風間さんは、秋田の茅葺文化を

維持継承していく決意を固めたようだ。

もう一人、佐藤茅葺店の佐藤偉仁さんは、羽後町田代のかやぶきの宿「古庭屋」の葺き替え工事が終了した昨年の九月、このようなコメントを出した。「私たち職人だけでなく、学生さん、地域の方々など、たくさんのお手伝いがあった完成した屋根です。現場には多くの人たちが訪れました。多くの人たちの応援する気持ちがつまった茅葺屋根が完成しました」と。

この十年ほどの間に、秋田の茅葺職人は見事な世代交代を果たした。アナログの至極ともいえる茅葺職人の世界は、デジタルが普遍化する現代社会の、片隅を照らす灯のように思える。